

大学生における規範意識の醸成に関する取り組み

—マナー・モラル・ルールについて考える授業を通して—

植田 和也 ・ 藤本 佳奈*
(附属教育実践総合センター) (香川大学キャリア支援センター)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学キャリア支援センター

The Measure about Brew of the Normative Consciousness in a College Student: Let a Lesson to consider about Manners, Morals and Rule

Kazuya Ueta and Kana Fujimoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Career Support Center, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要旨 本稿では「主題Aマナー・モラル・ルールについて考えよう」の受講者による意識調査や授業評価を分析し、学びとしてどのように受け止められているのか、さらに全ての授業終了後にどのような感想や意識を持っているのかを探ることとする。そのことを通して、規範意識の醸成に寄与しているのか検討していく。そして、本学での「市民としての責任感と倫理観」を育む今後のよりよい授業改善に生かしていきたいと考える。

キーワード 規範意識 責任感と倫理観 意識と行動 学生の評価と学び グループワーク

はじめに

本稿では、「21世紀型市民」育成のため、香川大学において平成23年度以降実施されてきた共通教育主題A「人生とキャリア」に位置づく、授業科目「マナー・モラル・ルールについて考えよう」(平成26年度前期実施)の授業実践を通して、大学生の規範意識や態度の変容に関して考察していくこととする。主題A「人生とキャリア」は、平成23年度から必修とされ、「人生」や「生き方」といった広い意味での「キャリア」をテーマとした科目である。平成26年度からの実施においては、シラバスや内容構成において「市民としての責任感と倫理観」の

より一層の明確化や強化が求められた¹⁾。このことについて、残念ながら学生の不祥事続発や自転車等の使用や駐輪に関する学内外のマナーやルールに関して、改善しなければならない出来事が起きていることは紛れもない事実であろう。そのような厳しい現実を感じながら、筆者は平成26年度から主として1年生が受講する主題Aを担当することとなり、本授業を構想した。

主題Aの実施に関する検証には、葛城ほか(2011)²⁾や平ほか(2014)³⁾があり、そのなかで葛城は、自らの授業を省みて「市民としての責任感と倫理観」を授業の流れの中に位置づけることの難しさを述べるとともに、平成24年度か

らは、学生の授業評価項目に「この授業は社会において自分が果たすべき役割について考えることができる」という新規項目を付加することも同時に提案している^{iv}。だが、平成25年度の内容から見ると、責任感と倫理観を授業の中核に据えて、シラバス等にも当該内容を記載し取り扱っている授業科目はみられない。その点に関して、大学教育開発センター調査研究部編(2014)では繰り返し、シラバスに一目でわかるような形で明示してほしいことを指摘している^v。そこで、本授業においては、マナー、モラル、ルールに関する具体的内容を素材として取り入れながら規範意識の醸成という視点から、責任感や倫理観を位置付けて中核として扱っていきこうと構想した。そのような点から、規範意識や態度に関する事前・事後のアンケート調査、授業評価や表現物を分析し、本授業が学生にとって規範意識や態度の変容に有効であったのかを考察したい。また、本授業が学生

の学びとしてどのように受け止められているのか、さらに、授業の進め方や内容がどのように認識されているのかを探ることとする。

1 授業内容について

(1) 授業の概要

シラバスやオリエンテーションで学生に配布した授業の概要には次のように示した。詳細は表1の通りである。

「人間が集団の中で気持ちよく過ごすためには、守るべきルールや一員としてのモラルある行動が求められる。現代社会の諸問題には、それらについて考えるべき視点が多く存在する。この授業では、マナー、モラル、ルールについて、実社会の現状や課題を具体的に取り上げながら、自ら考えたりグループで議論したりすることで、大人・社会人・市民としての自覚や責任感を育むとともに、

表1 平成26年度前期の授業計画「マナー・モラル・ルールについて考えよう」

回	内 容
1	オリエンテーション 授業の約束について 進め方、授業名札、課題等 アンケート マナー・モラル・ルールについてのイメージ
2	マナー・モラル・ルールについて① 「私たちの社会生活とマナー・モラル・ルール」
3	マナー・モラル・ルールについて② 「学校の道德教育と大人社会の不道德から考えよう」
4	集団におけるルールの必要性について考える① 家庭や社会 「社会におけるコンプライアンスや家庭のしつけ」
5	集団におけるルールの必要性について考える② 個と集団 「秩序とは?ルールは必要なのか」
6	ものの見方・考え方の発達① 道徳性発達段階 「みつめよう 私の道徳性や向社会的行動について」
7	ものの見方・考え方の発達② 生命の尊さと生命倫理 「考えよう 私の道徳性や向社会的行動について」
8	グループディスカッションⅠ 「納得できない大人社会の○○、まねたい大人の○○」
9	現状に学び考えよう① 香川大学の現状から、正しく知ろう「学内懲戒規定」と過去の事案から学ぶ 学生憲章
10	特別講師：現状に学び考えよう② 香川県の現状から「万引き防止、ネット犯罪、自転車のルールやマナー」
11	全体討論Ⅰ めざす○○像を描こう「よりよい生き方を求めて～理想の社会人・大人をめざして～」～社会に生きる一人の人間として～
12	グループディスカッションⅡ 「大学生のマナー・モラル向上をめざして」ポスターの内容について
13	特別講師：現状に学び考えよう③ 大学生や若者の現状から「金融犯罪に巻き込まれないために」
14	グループプレゼンテーション 「大学生のマナー・モラル向上をめざして」ポスター発表作成
15	全体討論Ⅱ 「大学生のマナー・モラル向上をめざして」 まとめ「大人・社会人・市民としての自覚と責任感」

注) 下線部の回は植田・藤本のT Tで実施

よりよい生き方について考える場とする。」

前述のとおり本授業を通して、「市民としての責任感と倫理観」を育むために重要視したことの一つが「考える場」の確保や意図的な設定である。一人で考えるだけでなく、学部も違う知らない他人とグループを組み「ともに考え合う」ことなのである。そこで、初回の授業の際、できるだけ学部が混じり合うグループ編成を行った。そして、学んだことを生かし、自分だけでなく大学生のマナー・モラル向上に資する方策をグループで協議してプレゼンテーションしたり、大学生のマナーやモラルに関する自分たちの意見をポスターや映像等で、他者にわかるように表現したりすることを最終レポートとは別に課題として与えることとした。授業計画中の第5回では、文部省の道德教育推進指導資料第6集『社会のルールを大切に作る心を育てる』より、「おばあさんの抗議」を活用して大学生にも村民の立場からグループ、全体で討論を取り入れて考えさせた。補助的に「人間とルール」「ルールの意味を考えよう」^{vi}も紹介した。

第6回では、ものの見方・考え方の発達に関して、他律から自律への事例やピアジェ、コールバーグ、ブルの発達段階説に関して紹介した。その際に、絵話で「誰のを先にしようかな」^{vii}や「ハインツのジレンマ」を示して、グループでの演習の時間も設けた。

また、第7回目の生命の尊さと生命倫理に関する際は、生命倫理に関する過去の綱領や法律等について紹介する際に、実際の事例等をもとに議論する場も設けた。その際の資料として、NHK道德ドキュメントの15分映像、君ならどうする「いのちの判断」^{viii}の視聴や教科書会社の副読本「ドナーカード」^{ix}を紹介し考えさせた。

それ以外にも先輩学生たちにより作成された香川大学学生憲章の紹介も行った。最後に、『大学生のマナー・モラル向上』に関する内容で、創造的な呼びかけポスター作製を行い発表した。(ポスターは、大学祭やオープンキャンパスにおいて学内掲示や啓発広報を行った。)学生が主体的に取り組める参加型・体験型の授

業形式を多く取り入れてきたことや決して体験だけで終わらないこと、活動あって学びなしとにならないように「思考と表現の一体化」を大学生自ら実体験できるように意図しながら授業を展開してきた。

(2) グループ活動のねらいと実際

マナー、モラル、ルールについて与えられた資料やプレゼンをもとに受身的に捉えるのではなく、大学内や社会のそれらに関する課題と改善の方策を自ら考える場を意図的に設けていくこととした。さらに、グループで議論やプレゼンテーションを作成することで、自分とは違う考えや方法を取り入れながら協議する時間を設定した。そのような過程を通して大人・社会人・市民としての自覚や責任感を育むとともに、自らの生き方について考える場とした。

(3) 外部講師の活用とねらい

特別ゲストとして、香川県警察本部の少年犯罪担当者や金融機関に勤務する専門家から、現状に学ぶ機会も意図的に設定した。そのねらいは、授業担当者よりも専門家としての立場から、最新で県内の実情を踏まえた内容を学生たちに提供できると考えたからである。さらに、万引きやネット犯罪、金融犯罪など社会的な問題として、他人事ではなく自らのこととして捉えてほしいとの願いもあった。責任感と倫理観といっても、現実に社会や身の回りで起きている事例等をもとに考えなければ、高校を卒業したばかりの1年生には難しいと判断したことも少なからずあったといえる。このような理由から、外部講師の方による授業が、より喫緊の課題であるという切実感や実感がわき易く、心に響きやすいと考えた。具体的には、県警の担当者には「万引き防止、ネット犯罪、自転車のルールやマナー」についての香川県の現状や大学生に特に関する内容を依頼した。また、金融機関の担当者には、「ネット犯罪・金融ローン被害に巻き込まれないために」について、具体的な内容や実態等にも触れながらのミニ講義をお願いした。その際に少しでも演習的な場面や

学生が考える機会を設けてほしい点も加えて依頼した。

2 マナー・モラル・ルールに対するイメージ

マナー、モラル、ルールは私たちの生活に密接に結びついている。それらに対して学生はどのようなイメージを抱いているのだろうか。表2には受講生(54名)を対象に、第1回目の授業の際に、マナー、モラル、ルールからそれぞれ連想される言葉をたずねた結果を示してある。まず、マナーからみていこう。マナーから連想される言葉として上位にあがっているのが「食事」、「公共機関の乗物」、「交通」、「たばこ」である。それぞれテーブルマナー、乗車マナー、交通マナー、喫煙マナーといった言葉があるように、マナーが必要とされる、あるいはマナーを守るべき具体的な場面を想定して回答したものと考えられる。また、「常識」を連想した学生も少なからず存在し、マナーを守るという行為自体を、「常識」だと位置づけているようだ。

次に、モラルから連想された言葉を確認していこう。特徴的なのが、マナーやルールと比べて連想される言葉に偏りがみられたことである。「道徳」の出現数が特出して多い。おそらく、モラル=moralの和訳が「道徳、道徳的」なので、そこから連想した学生が多かったものと考えられる。「道徳」に続く言葉には、「常識」や「思いやり」があるが、出現数は「道徳」の

三分の一以下である。

最後に、ルールについてみていこう。「交通ルール」、「学校(校則)」、「スポーツ」などルールが定められている空間や、「法律」、「規則」などルールの類似語を挙げた学生が多い。また、「守るべきもの」という回答も多く、ルールをそのように認識していることが分かる。

以上のようにマナー、モラル、ルールに対して学生が抱いているイメージを、それらから連想される言葉を中心に検討を行った。連想される言葉は、それぞれが必要とされる場面や空間を思い浮かべたものだったり、語句の和訳あるいは類似語だったり多岐に渡っていた。次章で触れるように、マナー、モラル、ルールは似ているようで、それぞれが指し示すものは異なるっている。学生もそのことは認識しているようだが、明確に説明するとなると難しいと感じているようだ。学生の回答からはそのようなことが読み取れる。

3 社会生活とマナー・モラル・ルール

ここからは、マナー、モラル、ルールが一般的にどのようなものとして説明されているのか、簡潔に述べていきたい。

(1) マナーとは何か

まず、マナーとは何だろう。辞書的な意味を確認すると「行儀。作法。礼儀。」(大辞林 第三版)という説明がなされている。作法は、物事を行う方法、礼にかなった立ち居振る舞いで

表2 「マナー」、「モラル」、「ルール」から連想される言葉

マナー	出現数	モラル	出現数	ルール	出現数
食事	16	道徳	18	交通ルール	17
公共機関の乗り物	15	常識	5	守るべきもの	13
交通	13	思いやり	5	学校(校則)	12
たばこ	9			スポーツ	11
常識	8			法律	9
				規則	9

注) 受講生にはそれぞれの言葉から連想できる言葉を最大3つまで書くように指示した。表には出現数の多い言葉を掲載している。

あり、しきたりとしての側面を持つ。行儀は、作法にかなう立ち居振る舞いのことで、礼儀は他者と交流する際、人として踏み行うべき作法とある。

辞書的な意味から、マナーは礼儀や作法と強く結びついていることが分かる。その一方で、マナーは人間的な在り方と動物的な在り方を分ける身体技法の一種として説明されることも多い。このことについて、矢野智司は次のように述べる。

「食事作法に厳しい規則があるのは、肉を裂き口に入れるといった食事の所作が、性交や排泄とならんで人間が動物的な次元に近づく行いだからである。マナーを知らない者は「文明」を知らないものであり、「粗野」であり「野蛮」であり、つまりは動物と変わらないとみなされるのである。」³

私たちが、マナーがなっていない人物に遭遇すると、「みっともない」、あるいは「恥ずかしい」と感じるのは、そうした行為を動物的だと無意識的に感じているからなのだろう。

また、マナーを法（ルール）や道徳（モラル）との関係でみていくと、マナーは「法と道徳の中間に位置する準ルール」⁴として捉えることができる。マナーに反した振る舞いは、人を不愉快な気分させることはあるが、「道徳に反する行為のように、人間性の本質におよぶ問題でなければ、犯罪のように社会秩序の根幹を揺るがすことでもない」⁵。そのため、マナーを守ることに對する強制力は自ずと弱くなる。すなわち「他者が行為を請求することはできず、マナーを守るか否かは本人の裁量に任せられるところが大きい」⁶のである。だからこそ、私たちはマナーを守る人には品の良さや、優れた人格を感じ取るのだろう。以上のように、マナーは自己あるいは他者の持つ動物的な次元を抑制するだけでなく、行為者の品性や人格とも結びついた身体的技法だといえる。

（2）モラルとはなにか

情報モラル、ネットモラル、報道のモラル、医療モラル、社会のモラル、大人としてのモラ

ル、など日常生活では多様に使われているが、その殆どは好ましくない状況や現状に規制をかけるような場面で見聞きすることが多いのではないだろうか。過去にも、耐震偽装、食品偽装、偽番組など社会的信用を失墜する行為が多発したことを受けて、企業のモラルやコンプライアンス（法令遵守）を徹底するという風潮が拡大されてきた。つまり、モラルの欠如や不足は、若者たちだけの問題ではなく、むしろモデルとなるべき大人や社会全体の問題であるといえる。

さて、辞書的な意味を確認すると、広辞苑では、モラルは、「①道徳。倫理。習俗。②道徳を単に一般的な規律としてではなく自己の生き方と密着させて具象化したところに生まれる思想や態度。」とあり、倫理は、「人倫のみち、実際道徳の規範となる原理、道徳。倫理学の略。」である。また、高校の公民科用教科書では、倫理について「人間集団の規律やルールのことであり、『人間』として生きるべき道筋、『人間』にふさわしいあり方・生き方」とも表現されている。

上記の点からも、モラルとは、社会や集団で生きる個々人の倫理観や価値観であり、さらに、マナーと比較すれば、より普遍的な価値観を含み、道徳的な判断や行為に関する意識や公序良俗に反しない態度や行動全般とも解される。

（3）ルールとは何か

最後はルールである。類似する語句には、規則、規定、きまりなどがある。学生には「守るべきもの」として認識されており、規範としての側面が強い。

ルールの社会的機能のひとつに、社会秩序の維持・形成というものがある。私たちがルールを無視して、いつも勝手気ままな行動をしていたらどうなるだろうか。おそらく無秩序状態となり、ホップズのいう「万人の万人に対する闘争」状態になるだろう。また、ルールは人々の行為に対するガイドラインとしての機能も有している。法律や校則で決まっているから、それに従った行動をとるといえるのはもちろんのこ

と、就職活動におけるリクルートスーツのようにルール明確に決まっているわけではないが、みんなが着用しているから自分もそれに従うというのも、ルールにガイドラインとしての機能が備わっているからである。

こうした社会的機能に従って分類すると、ルールは「慣習・習俗」と「習律・法」の2つに大別できる。慣習・習俗は「人を事実上の力によって秩序に向かわせる規範（ルール）」^{xiv}であって、「人々に「そういうもの」として認知された規範（ルール）」^{xv}である。衣食住に関する生活習慣、挨拶や言葉遣いなどの人間関係が主な対象である。先に示したリクルートスーツの例もこれに当てはまる。習律・法は、「人々がそうすべきである、そうすることが正しいことなのだ」と考えて、それゆえ通常は多数の人びとによって守られている規範（ルール）」^{xvi}である。これは、法律や校則をイメージすると分かりやすい。

ここまでマナー、モラル、ルールとは何かについて、それぞれ説明を行ってきた。簡潔にまとめると、マナーは人間を動物的な次元から分離し、品性や人格と結びついて身体技法、モラルは道徳や倫理であり、社会や集団で生きる個人々の倫理観や価値観、ルールは社会秩序の維持・形成、人々のガイドラインとしての機能を持った決まり事だといえる。それぞれ指し示

すものは異なっているが、円滑な人間関係の構築や、安定した社会の維持・形成において重要なことがらであることは間違いない。

4 学生の学びからみる授業の成果

全15回の授業を通じて受講生は何を学んだのだろうか。ここでは、アンケート調査や学生の授業に対する感想を手がかりに学習成果の一部を確認していきたい。

(1) 意識・態度の変化

まずは、アンケート調査の結果から授業期間中の学生の意識や態度の変化を確認していこう。アンケート調査は授業の前半（第1回目：4月11日）と後半（第14回目：7月18日）の計2回実施された。アンケート調査では、以下の13項目について、「どの程度重視しているのか」（意識）、「どの程度できるか」（態度）それぞれ4件法でたずねた。

「①社会におけるルールやマナーについて理解すること」、「②社会におけるルール・マナーを守ること」、「③他人に働きかけ巻き込むこと」、「④自分の意見を分かりやすく伝えること」、「⑤相手の意見を丁寧に聴くこと」、「⑥意見の違いや立場の違いを理解すること」、「⑦自分と周囲の人々や物事との関係

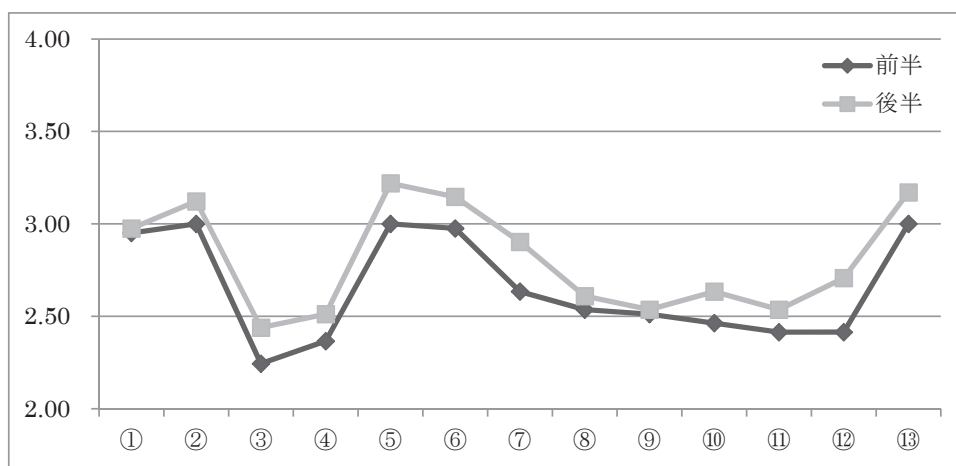


図1 どの程度できるか（態度）

注）図中の○番号は質問項目の番号に対応している。

性を理解すること」,「⑧物事に進んで取り組むこと」,「⑨目的を設定し確実に行動すること」,「⑩現状を分析し目的や課題を明らかにすること」,「⑪課題の解決に向けたプロセスを考え準備すること」,「⑫活動や行動, 考え方などで新しい価値を生み出すこと」,「⑬ストレスがあってもそれに耐えること」

意識の変化については前半と後半でほとんど違いがみられなかったが, 態度については図1に示したように多少の変化を確認することができた。項目ごとに差はあるが, どの項目も授業後半の方が値が高くなっている。こうした変化は, そもそも授業前半の水準がそれほど高くなかった-最も値の高い「②社会におけるルール・マナーを守ること」と「⑤相手の意見を丁寧に聴くこと」でも3.0ポイント-ことも後半の伸びに影響したと考えられる。つまり, 伸びしろがあったということだ。そうはいっても, 前期約4か月足らずの間に, 全ての項目で伸長がみられたのは大きな成果であろう。

もちろん, このような学生の変化はこの授業だけが原因で引き起こされたものではない。他の授業や課外活動など様々な活動が複合的に絡みあって引き起こされたものと考え方が自然であろう。ただ, 学生の変化に対して他の授業や課外活動がどの程度影響を及ぼしたのか正確に計る術はない。学生の変化に対するこの授業の貢献度合いについては, 後述する授業においての学生のまとめや感想等からみられる生の声も参照し考察したい。

このように正確な数値で表すことはできないが, 本授業の実践と学生の変化に関わる因果関係を考えた場合, 授業実践は学生の態度の変化に少なからず影響を与えていたと考えられる。特に変化が大きい項目-「⑦自分と周囲の人々や物事との関係性を理解すること」と「⑫活動や行動, 考え方などで新しい価値を生み出すこと」($p < 0.05$)-を例にとるが, これについてグループワークの影響が見受けられる。

上述のように, この授業は演習的なグループワークをほぼ毎時間導入していた。グループでの話し合いや課題解決に向けた作業が「⑦自分

と周囲の人々や物事との関係性を理解する」力の獲得につながったのではないだろうか。また, グループワークの集大成として, 授業の最後に学生のマナー・モラル啓発を目的としたポスター等を制作した。ポスター等を学生たちの発想で自由に作り上げる, こうした作業を通じて「⑫活動や行動, 考え方などで新しい価値を生み出すこと」, すなわち創造性が培われたのかもしれない。また, 後述するように学生はグループワークを高く評価している。他学部の学生と意見を交換すること, 自分とグループのメンバーと協力しながら一つのものを作り上げること, そうした一連の作業を通じてコミュニケーション能力の向上を感じている学生も少なからず存在していた。

このように, 授業での実践内容やそれに対する学生の反応を踏まえると, 図1に示した学生のポジティブな変化に対して, 本授業は-特にグループワークを通じて-少なからず影響を与えていたと推察されるのである。

(2) 授業を通じた学生の学び

第15回目の授業の最後(7月25日)と, 最終レポートにおいて, 「この授業を通して学んだこと」を授業の感想として提出させた。代表的なものをいくつか抜粋して紹介したい。

①マナー・モラル・ルールへの言及

「この授業を通して学んだこと」について, 最も学生の言及が多かったのが, 授業の主テーマであるマナー・モラル・ルールに関するものである。そのひとつが以下に示したように, マナー, モラル, ルールの違いを認識できるようになったというものである。漠然と認識してはいたが, 授業を通じてそれらの違いを考えることで, それぞれに対する輪郭が浮かび上がってきたようだ。

マナー, モラル, ルールの違いをはじめははっきりと答えることができなかったが, この授業を通してそれぞれの特徴や意味についてじっくり考えることができたのはよかった。(工学・男・2014/07/25感想)

また、マナー、モラル、ルールについて学ぶなかで社会との接続を意識したという感想も多くみられた。社会と学校との接続において、大学は最後の教育段階である。学生もそれを自覚しており「これから社会人になる上で」、「これから大人への仲間入りをしていくなかで」、マナー、モラル、ルールについてしっかり考えたことは有益だったと感じているようだ。

これまでの自分はマナーやモラルについて考えることはあまりなかった。—中略—この授業を通して、自分が社会人になる上で身に着けなければならないことがたくさんあると自覚するようになった。

(経済・男 2014/07/25感想)

大学生として、これから社会人になる身として、「マナー、モラル、ルール」というのは、大変重要なことである。それらを授業を通して考え、身につけることができたと思う。(経済・男 最終レポート)

このほか、実際の行動に言及した学生も多かった。特に自転車のマナーについては身近な事柄であるので、実体験を交えながらマナーを意識するようになったと述べている。

私は、自転車マナーについての意識が変わったように思います。雨の日にはカッパを着て自転車に乗るようになりました。信号無視はしないようにしようと心に決めました。(医・女 2014/07/25感想)

以上のように、学生の感想からは、授業を通じてマナー、モラル、ルールの輪郭がはっきりしたこと、それらを意識するようになったことなど、学生の意識レベルの変化を確認することができた。行動レベルの変化は読み取れないが、これらかのことを考えると大きな一歩であろう。「大学生として」「これから社会人になる身として」、マナー、モラル、ルールに関して自覚的になることが、その後の行動につながるのである。

②グループワークの成果

グループワークに対する学生の評価は高い。以下では、学生の感想をもとに、グループワークのどのような点を評価しているのか考察していきたい。

もっとも多かったのが、グループでの意見交換である。自分とは違う意見を聞くことができ、考え方の幅が広がった、自分では思いつかないような意見を聞いて考えを深めることができたなど、授業の中で意見交換の時間が持たれたことを積極的に評価している。

マナー・モラル・ルールの問題は人に関わることであるから、自分とは違う意見があるとは思っていたが、想像した以上に様々な視点があり、とても有益だった。(法・女 最終レポート)

マナー・モラル・ルールは、価値観に関わってくるので、人によって感じ方が異なってくる。グループのメンバーで意見が割れることもあっただろうし、ちょっとした議論にまで発展することもあっただろう。他者の意見を聞くことは自身の見識を深めることにもつながる。そのため、座学にて講師の話聞くだけの授業スタイルよりも学生にとって得るものが大きかったのだろう。

また、役割意識や責任感について言及する者も多くみられた。ポスター等を作成するという課題に臨むには、チームとしての協力が必要不可欠である。また、この授業では1グループ4名という小集団であったため、グループのメンバー一人ひとりが何かしら役割を担わなければならない。そうした状況で作業を進めていったからこそ、役割意識やチームとしての責任感を自覚するようになったのだろう。

ひとつのものを皆で作るということで、一人ひとりが自分のやるべきことをやり、協力する機会をもつことができ、責任感を感じた。(経済・女 最終レポート)

班活動をしていると、自分とは異なった視点での意見や、班での創作物での気配りに驚かされたり、感心する部分が多かったと思う。また、パソコンの使い方など、頼りにさせてもらうことも多く、様々な人間が班を構成するということの重要性が身に染みだ。

(法・男 最終レポート)

上記以外にも、「他学部と交流できて良かった」、「この授業を受けていなければ一生関わることのなかった人たちと交流できた」など人間関係の広がりを指摘するものや、グループワークを通じて協調性が培われたなど、コミュニケーション力の向上を指摘した意見も散見された。

学生だけに議論を任せると、全く盛り上がらなかったり、反対に盛り上がり過ぎて話が脱線したりすることがある。個別の授業の中ではそういったことも起こっていただろうが、最終的な学生の感想からはグループワークに対するネガティブな発言は見当たらなかった。毎回グループワークを導入していたことを踏まえると、学生の慣れというものもあっただろう。しかしそれ以上に、メンバーの役割認識の芽生えなど、回を重ねるごとにグループが成熟していったことが、グループワークに対する高評価につながったものと考えられる。

(3) 学生による授業評価より

2014年度前期の学生による授業評価アンケートのうち、特に以下の5項目に着目した。回答率は本年度からWEBでの回答となったため69.23%と約7割程度であった。

①授業への取組について

まず、「この授業に熱心に取り組みましたか」という設問に94.4%の学生が肯定的に回答(「どちらともいえない」の2名以外)している。その主たる要因となったのか判別はできないが、特に意識したこととしては次の5点である。①大学に入学したばかりの1年生にとって、自ら

考えたい課題の提示と双方向を意識した授業の流れ、②短時間であってもグループワークで学生自らの活動・表現の場の確保、③マナーやモラルの向上に向けて自らが解決に寄与する作成物を考えて協働で取り組むこと、④外部講師等による現実的で自らの意識や社会生活に関係していると感じられる内容を準備すること、⑤選択できる課題図書[※]から幅広く考えて、グループ討議に多様な意見が出ること、である。このようなことが少なからず肯定的な回答の背景にあると考える。

②授業の構成や内容について

アンケートの設問Ⅲでは、概ね良好な回答が得られた。特に、「授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている」の設問に対する平均回答は、4.42(種別全体4.07)、「この授業は、将来の自分にとって有益である」は、4.53(種別全体4.04)と、好意的に受け止められている。

さらに、設問Ⅳの「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」は4.08(種別全体3.74)、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」には、4.44(種別全体4.00)で肯定的な回答をし、おおむね学生の満足度も高い。なお、「市民としての責任感と倫理観」に関する授業として平成24年度から新規に位置づけられた評価項目の「この授業は社会において自分が果たすべき役割について考えることができる」では、4.53(種別全体4.11)という結果であった。当然、改善点や反省点はあるが、これらの満足度は、学生のレポートやアンケート自由記述等からもみられる。

(4) 作成した啓発用ポスター

実際に学生がグループで作成した啓発ポスターの内容は次の通りであった。

自転車のマナーに関して4グループ、駐輪等のマナーに関して2グループ、歩きスマホの危険性、ネットリテラシー、携帯マナー、たばこのポイ捨て、行動の責任に関して各1グループであった。なお、ポスターでなく動画による

啓発映像を作成したグループもあった。動画内容は、「歩きスマホの危険性」と「香川大学生のマナー・モラル」に関するものであった。どれも短時間での作成であったが、グループのメンバーでよく検討し、香川大学生の実態に応じた内容となっていた。特に、自転車に関して多くあげられたのは、身近であるとともに問題を感じていることの表れであろう。作成したポスターは、その後オープンキャンパス等で学内啓発用として掲示した。(ポスターの一部を資料として後頁に掲載する。)

おわりに ー今後の課題と改善ー

本授業で扱った資料の是非や効果、全体の構成等も含めて、内容の再検討が重要である。そのような点も踏まえて、一方的な押し付けとならないで、「市民としての責任感と倫理観」を育むためのよりよい授業改善を模索していきたいと考える。その具体的な視点とまでいえないが、改善を検討すべきこととして例えば次のようなことが考えられる。

- ・マナー・モラル・ルールと3つの視点からと欲張っているのが、扱っている内容の焦点化と現実的な問題の優先順位。
- ・ルールの必要性や道徳性の発達に関する提示資料や課題の開発。
- ・香川大学の過去の学生の不祥事に関する内容提示の是非、するとすればどのような形をとるべきか。
- ・規範意識や行動の変容に関する継続的な調査と学生への効果的な働きかけ。

【参考文献】

友枝敏雄・竹沢尚一郎・正村俊之・坂本佳鶴恵(1996)『社会学のエッセンス』有斐閣アルマ。
西本佳代・浦上光朗・古賀正義・越智康詞・松田恵示・加野芳正(2011)「大学生のマナーに関する実証研究(上)」『香川大学研究報告 第I部』135号、23-40頁。
西本佳代・浦上光朗・古賀正義・越智康詞・松田恵示・加野芳正(2011)「大学生のマナーに関する実証

研究(下)」『香川大学研究報告 第I部』136号、1-13頁。

西本佳代・浦上光朗・古賀正義・越智康詞・松田恵示・加野芳正(2014)「子どものマナーと作法」『香川大学研究報告 第I部』141号、25-42頁。
前田英樹(2001)「倫理という力」講談社 現代新書
植田和也(2014)「日常生活の中で形成されるモラルとは」『授業力&学級統率力』8月号 明治図書

ⁱ 香川大学教育開発センター(2014)『全学共通科目教員ハンドブック2014年度版』4-5頁。

例えば、授業に関する具体的な研究報告として、時岡晴美、岡田涼、大久保智生(2013)「主題A「人生とキャリア」における「市民としての責任感と倫理観」の授業実践～「人生選択の社会学」の授業における万引き防止教育プログラムの実践と評価～」『香川大学教育研究』第10号 91-100頁、がある。

ⁱⁱ 葛城浩一ほか(2012)「主題A「人生とキャリア」の検証」『香川大学教育研究』第9号 11-38頁。

ⁱⁱⁱ 平篤志ほか(2014)「全学共通教育新カリキュラムの検証」『香川大学教育研究』第11号 1-9頁。

なお、主題A創設の経緯に関しては、葛城・西本(2011)「キャリア教育の拡充の経緯-「特別主題」から「主題A」へ-」『香川大学教育研究』第8号 15-25頁、を参照されたい。

^{iv} 前掲書 葛城ほか(2012) 38頁。

^v 大学教育開発センター調査研究部編(2014)「全学共通教育の平成26年度実施に向けた研修会(FD)報告」『香川大学教育研究』第11号 11-17頁。

^{vi} 配布した3資料は、山岸明子「おばあさんの抗議」、藤田正勝「人間とルール」、伊藤隆二「ルールの意味を考えよう」、道徳教育推進指導資料6『社会のルールを大切にすることを育てる』1996文部省

^{vii} 「誰のを先にしようかな」の実践事例の詳細は、荒木紀幸編著(1988)「道徳教育はこうすればおもしろい」北大路書房100-105頁や徳永悦郎著(1995)「ジレンマ学習による道徳授業づくり」明治図書72-93頁を参照。

^{viii} 映像番組の君ならどうする「いのちの判断」(NHK道徳ドキュメントの企画協力:永田繁雄ほか)は、NHK道徳ドキュメントのHPで視聴可能。DVD

も販売。15分映像であるが番組はいくつかのシーンごとにも区切られており授業等で活用しやすい工夫がされている。実際にあった出来事や人生体験をとりあげ、現実の問題と向き合い、教室や家庭で話し合うきっかけを与える構造でもある。

^{ix} 廣済堂あかつき (2013) 「ドナーカード」『中学生の道徳3 自分をのばす』36-37頁

^x 矢野智司 (2008) 『贈与と交換の教育学』東京大学出版 241頁。

^{xi} 同上 239頁。

^{xii} 同上 240頁。

^{xiii} 西本佳代 (2014) 「大学生の市民的責任感の獲得状況」加野芳正・葛城浩一編『高等教育における市民的責任感の育成』(高等教育叢書125) 広島大学高等教育研究開発センター 63頁。

^{xiv} 和田安弘 (1994) 「日常の中の社会学・応用編」『人間関係論集』55頁。

^{xv} 同上 55頁。

^{xvi} 同上 56頁。

^{xvii} 学生に提示した選択して読むべき課題図書としては、<道徳・倫理関係><法令遵守(コンプライアンス)><マナー関係><市民社会について考える>の4つの分類を示し、15冊を示した。例えば、①前田英樹(2001)「倫理という力」講談社、②松下良平(2011)『道徳教育はホントに道徳的か?』日本図書センター、③村井実(1990)『道徳は教えられるか』国土社、④和辻哲郎(2007)『人間の学としての倫理学』岩波書店、⑤郷原信郎(2009)『思考停止社会』講談社、⑥星野一正(1991)『医療の倫理』岩波書店、⑦北折充隆(2013)『迷惑行為はなぜなくなるのか?』光文社、他である。

資料：事前・事後の規範意識、態度に関する対応サンプルの検定（t検定）

対応サンプルの検定 意識

	平均値			対応サンプルの差					t 値	有意確率 (両側)
	事前	事後	変化	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間			
							下限	上限		
1. ルールやマナーの理解	3.39	3.37	↓	0.02	0.65	0.10	-0.18	0.23	0.24	0.81
2. ルール・マナーを守ること	3.49	3.61	↑	-0.12	0.56	0.09	-0.30	0.05	-1.40	0.17
3. 他人に働きかけ巻き込むこと	2.61	2.73	↑	-0.12	0.68	0.11	-0.34	0.09	-1.15	0.26
4. 意見を分かりやすく伝えること	3.20	3.39	↑	-0.20	0.64	0.10	-0.40	0.01	-1.95	0.06
5. 相手の意見を丁寧に聴くこと	3.56	3.63	↑	-0.07	0.52	0.08	-0.24	0.09	-0.90	0.37
6. 意見や立場の違いを理解する	3.49	3.49	—	0.00	0.67	0.10	-0.21	0.21	0.00	1.00
7. 周囲の人々との関係性を理解	3.32	3.27	↓	0.05	0.67	0.10	-0.16	0.26	0.47	0.64
8. 物事に進んで取り組むこと	3.05	3.20	↑	-0.15	0.57	0.09	-0.33	0.03	-1.64	0.11
9. 目的を設定し確実に行動する	3.20	3.15	↓	0.05	0.74	0.12	-0.18	0.28	0.42	0.68
10. 分析し目的や課題を明確に	3.07	3.32	↑	-0.24	0.73	0.11	-0.48	-0.01	-2.13	0.04
11. 解決へのプロセスを考え準備	3.00	3.12	↑	-0.12	0.64	0.10	-0.32	0.08	-1.22	0.23
12. 新しい価値を生み出すこと	3.05	3.15	↑	-0.10	0.80	0.12	-0.35	0.15	-0.78	0.44
13. ストレスに耐えること	3.39	3.20	↓	0.20	0.68	0.11	-0.02	0.41	1.84	0.07

対応サンプルの検定 行動

	平均値			対応サンプルの差					t 値	有意確率 (両側)
	事前	事後	変化	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	差の95%信頼区間			
							下限	上限		
1. ルールやマナーの理解	2.95	2.98	↑	-0.02	0.57	0.09	-0.20	0.16	-0.27	0.79
2. ルール・マナーを守ること	3.00	3.12	↑	-0.12	0.51	0.08	-0.28	0.04	-1.53	0.13
3. 他人に働きかけ巻き込むこと	2.24	2.44	↑	-0.20	0.68	0.11	-0.41	0.02	-1.84	0.07
4. 意見を分かりやすく伝えること	2.37	2.51	↑	-0.15	0.76	0.12	-0.39	0.09	-1.23	0.22
5. 相手の意見を丁寧に聴くこと	3.00	3.22	↑	-0.22	0.72	0.11	-0.45	0.01	-1.94	0.06
6. 意見や立場の違いを理解する	2.98	3.15	↑	-0.17	0.63	0.10	-0.37	0.03	-1.74	0.09
7. 周囲の人々との関係性を理解	2.63	2.90	↑	-0.27	0.74	0.12	-0.50	-0.03	-2.31	0.03
8. 物事に進んで取り組むこと	2.54	2.61	↑	-0.07	0.65	0.10	-0.28	0.13	-0.72	0.47
9. 目的を設定し確実に行動する	2.51	2.54	↑	-0.02	0.61	0.10	-0.22	0.17	-0.26	0.80
10. 分析し目的や課題を明確に	2.46	2.63	↑	-0.17	0.74	0.12	-0.40	0.06	-1.48	0.15
11. 解決へのプロセスを考え準備	2.41	2.54	↑	-0.12	0.56	0.09	-0.30	0.05	-1.40	0.17
12. 新しい価値を生み出すこと	2.41	2.71	↑	-0.29	0.84	0.13	-0.56	-0.03	-2.22	0.03
13. ストレスに耐えること	3.00	3.17	↑	-0.17	0.86	0.13	-0.44	0.10	-1.27	0.21

資料 学生が実際に作成した啓発用ポスターの一部

① ネットリテラシー

② 駐輪マナー

①のポスターに対する他グループの学生からのコメント

「言葉と写真、どちらもインパクトがあり、印象に残る。込められたメッセージがきちんと伝わってきてよい。スマホでの言葉の危険性を画像で表せているのも、身近に想像できてよい。」



②のポスターに対する他グループの学生からのコメント

「ぱっと見た感じが、さわやかでつい読みたくなる。文字もあるがシンプルにできていて分かりやすかった。」

